

## 自律性を重視した言語教育における教師の役割一考察

——カザフ国立大学の言語教育を例に——

ショリナ・ダリヤグル（筑波大学大学院生）

### 要 旨

近年、カザフスタンでは自律学習を重視した教育が実施されてきて、教師の役割は知識を与えることだけではなく、「支援者」と「ファシリテーター」であると強調されている。本稿では、自律学習を育成する教師側に注目し、教師が自分の役割をどう思っているか。また、どのような学習信念を持っているということを明らかにした。

キーワード：自律学習、教師の役割、学習行動

### 1. はじめに

社会の急激な変化と科学と技術の急速な発展につれて、現代の人間は新たな課題を抱えることとなった。その課題を解決するためには、ある分野に関する知識だけではなく、急速に変わる状況の中で対応する能力、その状況を分析する力、情報整理能力、そして、自律的に対応する能力が求められている。カザフスタンにおいても教育制度が変わりつつあり、特に自律学習が重視されてきた。大学教育でも、その自律学習能力を養成する機会を与えなければならないことが強調されてきている。伝統的な教育スタイルには知識を提供するという特徴があるが、現在のカザフスタンにおいて、学生は卒業までにある程度の知識を身につけるだけでなく、自律学習能力も求められている。

### 2. 自律学習とは

「自律学習」という用語と学習者の自律性を重視した教育という流れはまったく新しい現象ではない。言語学習の分野における自律学習 (autonomous learning) は 1979 年に Council of Europeans Modern Languages Project で初めて現れた(Benson 2006)。 Council of Europeans Modern Languages Project が目指した教育目標は大人の生涯教育であり、そこでは Self-Directed Learning という学習方法が提案された。それ以降、自律学習と自律学習能力が注目され、優れた言語学習者の欠かせない要素として研究されてきた。

自律学習に関する研究はヨーロッパとアメリカで中心的に行われ、それぞれの地域の研究には次の特徴は次のとおりである。ヨーロッパでは行われた自律学習に関する研究の多くが自律学習能力を社会で「生きる力」として扱っているが、アメリカでは自律学習能力を優秀な言語学習者の要素として扱い、自律学習能力を養成するために学び方に注目し、研究がなされた。先行研究では自律学習の効果と自律学習能力養成の重要性が述べられているが、そもそも「自律学習」の統一見解は見られない。Benson (2001) は自律学習の定義として「自分自身の学習に責任を持つことができる能力」、(Autonomy is the ability to take charge of one's own learning) という Holec (1979) の定義は最も使用されている定義であると述べている。次に、自律学習の定義の変遷を見ていきたい。1979 年から「自律学習」の定義が精緻化され、自律学習は具体的に学習者のどのような行

動によって現れるかと説明されている。例えば、Little (1995)では、Autonomy is a capacity –for detachment, critical reflection, decision-making, and independent action のように批判的に考えて、自律的に行動する学習者の能力として扱っている。Dam (1995)では Autonomy is characterized by a readiness to take charge of one`s own learning in the service of one`s needs and purposes. つまり、自分の学習目標とニーズを意識することによって、学習プロセスの主体になる自己主導型学習であると定義されている。

また、自律学習は一人で学ぶと誤解されることがあるが、それは、一人で計画を立て、学習を進むということを必ずしも意味しない。むしろ、周りの環境のリソースを活用し、効果的に学習を進める行動である。そのうち、教材などのモノのリソースだけではなく、仲間と教師のようなヒトのリソースが重要であることが以下の『日本語教育重要用語 1000』と青木 (1998) の定義から明らかになる。

自律学習(autonomous learning)とは「学習者自身が自己の学習に主体的に関わり学習を孤立化せず、教授者や教育機関などといったリソースを利用して行う学習」『日本語教育重要用語 1000』(1998)、または学習者が自分のために、自らの知識とスキルを構築しようとして、仲間や教師やその他のリソースと協力し、交渉しつつ行う学習を自分自身の手で管理することである(青木 1998)。また、青木 (2005) の「自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価できる能力」という定義では、学習プロセスをモニターする能力の必要性があげられている。また学習者が自分自身の学習に責任を持つことから、自分自身の学習をコントロールするというような変更が見られる。(The capacity to take control over one`s own learning. Benson ,2011)

自律学習が重視されてきて、「教える」より「学ぶ」ことが注目された。「教師中心」の学習から「学習者中心」の学習に移動する傾向にある。三宅 (2007) は学習者に「学ぶことを学ぶ」姿勢を主体的に身につけてもらうなかでは、教授—学習という教師と学習者の関係性や教師の役割も再考の対象となると主張し、学習者中心学習スタイルの中にも教師も存在していることがわかる。自律学習に関する誤解として「教師が必要ではない」と「教師が何もしなくていい」ということをあげることができる。

先行研究によって、自律学習の定義は多少異なるが、それが優れた言語学習者の性質であるという点は共通している。自律学習過程が自分の学習目標を意識する・それを実行するために計画を立てる・達成できる手段として様々なリソースを活用する・実施した結果をモニターし、評価するという段階であることが明らかになっている。

### 3. 本研究の目的

自律学習を重視したコースにおける教師の役割も検討され、「教授者」、「計画者」、「情報提供者」、「ファシリテーター」、「改革者」などという役割に類されている(梅田 2005)。「教師の役割」と「教師の能力」という観点の先行研究が多い。横溝 (2002) は日本語教師の資質と能力として「人間性」、「専門性」、「自己教育力」の重要性が強調され、「専門性」に比べ、「人間性」と「自己教育力」があまり注目されなかったと指摘している。先行研究で提案されている教師養成の研修と教師の役割に関する記述の多くが、教師の「専門性」の向上を目指していると言える。その中でも、教師は受身的な立場になっていることが多く、自律学習を重視した教育における教師がどう

変わるべきかということ述べている。

しかし、自律性を促進する過程では教師が果たす役割が大きいと思われるため、教師の変革の具体的提案を行う前に、教師の「声」も聞く必要があると考える。青木（2011）は自律学習能力の養成の目的で、トップダウンの教育改革によるものであるケースが少なくないと述べているように、カザフスタンもトップダウン方式が強い教育制度である。自律性を重視した教育制度を提案する前に、実際の教育現場の状況を考察する必要があるだろう。

本稿では、カザフ国立大学の言語教師が自分の役割をどう思っているか。また、教師は言語学習に関して、どのような信念を持っているかということ明らかにする。

#### 4. 調査対象者と方法

本調査の対象者は筆者が所属していたカザフ国立大学の韓国・日本学科の16名の教師である。9名が日本語教師と7名が韓国語教師である。一般的に言語学習に関する信念を把握するために、Horwitz（1987）の質問紙を用いたビリーフ調査がしばしば用いられる。しかし、そのアンケートの答えが選択肢で定められ、教師の個人の考えをあまり把握できないという問題点がある。

そこで本調査では、自由記述形式のアンケートを用いた。背景調査として、教師の性別、年齢、日本語（韓国語）教育歴、教師研修への参加について調査した。そして、アンケートの質問項目として、以下の項目を設定した。Q1.とQ2.が教師の役割についての質問であり、Q3.とQ4.が教師の信念を把握するための質問である。

Q1. 教師と学習者が学習に果たす割合は何%だと思いますか。

Q2. 教師として自分の役割はどのようなものだと思いますか。

Q3. 外国語学習に成功するための10の条件を教えてください。

Q4. 言語を教える際に、困難に思っていることがありましたら、教えてください。

調査期間は2014年9月15日から9月25日である。教師にアンケートを配布し、時間を制限せずに、自由に記入してもらった。

#### 5. 考察

調査対象となった16名の教師の概要は表1にまとめた。

〔表1〕調査対象の教師概要

性別			
男性-1名	女性-15名		
年齢			
26-30才：2名	31-35才：11名	36-40才：2名	46才以上：1名
日本語（韓国語）教育歴			
4年：1名	5年：1名	6年：2名	7年：6名
11年：2名	12年：1名	13年：1名	9年：1名
教師研修への参加			
ある：11名	ない：5名		

5.1. Q1. 教師と学習者が学習に果たす割合は何%だと思いますか。

対象者の 50%は教師としての自分の役割と学習者の役割の割合を 50%—50%であると答えた。次に、自分の役割より、学習者の役割の方が大きい「T 40% - S 60%」と答えた教師が多い。それから「T 30% - S 70%」、「T 20% - S 80%」と答えた教師が 2 名ずついるが、そのうち、1 名の教師が役割の割合を 2 つに分け、1-2 年生の場合は「T 30% - S 70%」であり、3-4 年生の場合は「T 20% - S 80%」なのであると回答で補足した。また、「T 30% - S 70%」と「T 20% - S 80%」というように教師より学習者自身の役割が非常に大きいと考える教師がそれぞれ 1 名いる。Q1.の回答を表 2 にまとめると以下のようなになる。

(T は教師、S は学習者を示している。)

〔表 2〕 Q1 への回答のまとめ

役割の割合	人数
T 70% - S 30%	1 名
T 60% - S 40%	1 名
T 50% - S 50%	8 名
T 40% - S 60%	4 名
T 30% - S 70%	2 名
T 20% - S 80%	2 名

5.2. Q2. 教師として自分の役割はどのようなものだと思いますか。

自由に記述してもらった教師の答えを私の役割、教師としての義務、教師の行動、教師の性質というように分類した。

〔表 3〕 Q2 への回答のまとめ

私の役割	支援者
	アドバイザー
	サポーター
教師としての義務	学習者に課題を出す
	学習者を評価する
	面白い授業をする
教師の行動	新しい情報を与える
	文法と語彙を教える
	専門知識を与える
	自分の知識と経験をシェアする
	基礎知識を与える
	学習方針を決める
	指針についてアドバイスする
	学習者に興味を持たせる
	学習者が自由に発言できる環境を作る

教師の回答をまとめると教師は自分の役割を「支援者」、「アドバイザー」、「サポーター」であると考えている。学習者の興味を引き、面白い授業を行うという役割を果たしているということが分かる。そして、知識を提供することも教師の重要な役割であると分かる。

### 5.3. Q3. 外国語学習に成功するための10の条件を教えてください。

Q3.の答えでは、3—4の条件しかあげていない2名の教師がいるが、残り教師が10の条件を書いている。言語学習に成功するためには、前段階として必要な事項として「その言語を自分の意思で選択すること」、「学習者の学びたいという意欲」、「学習者のモチベーション」、「明確な目標を持つこと」、「計画を立てる」などが必要であると考えられている。

教師が考える言語学習の成功のための条件として、学習者の行動、授業に対する態度、リソース活用、授業外の学習者自身の行動というカテゴリーに分類できる。本調査の対象者となった教師が考える言語学習に成功するための条件として、その言語でコミュニケーションすることと授業を欠席せずに積極的に参加し、教師が与える宿題を提出することで成功に繋がるという考えが強い。

リソースとして、いい教師が必要だという傾向がある。また、ネイティブスピーカーとコミュニケーションすることとその国の文化を理解することも重視されている。そして、教室外の学習者の行動として、とにかく自分で学習することが重要な条件となっている。それを表4にまとめる。

〔表4〕Q3. への回答のまとめ

学習者の行動	学習言語でコミュニケーションする	8名
	宿題をする	6名
	教師に質問などをし、教師に支援を受ける	3名
	教師の指示に従う	2名
	覚える	2名
	教師といい関係を作る	1名
授業に対する態度	授業を欠席しない	7名
	授業に積極的に参加する	6名
	先生の説明をよく聞く	1名
	準備して、授業に参加する	1名
リソース	いい教師	7名
	ネイティブスピーカーとコミュニケーションする	6名
	留学する	5名
	その国の文化を知る	6名
	映画	5名
	ドラマ	4名
	文学作品	1名
	たくさんの辞書を持つ	1名

授業外の学習者自身の行動	自分で勉強する（学習する）	7名
	スピーチコンテストに参加する	5名
	能力試験を受ける	5名
	語彙を増やす	5名
	言語を使用できる環境を自分で探す	2名
	毎日復習する	2名
	たくさん聞く	2名
	たくさん読む	2名
	たくさん話す	2名
	CDなどを聞いて、繰り返して言う	1名
	翻訳する	1名
	不明なところを調べる	1名
	自己コントロールする	1名
	自己評価する	1名

#### 5. 4. Q4. 言語を教える際に、困難に思っていることがありましたら、教えてください。

困難に思っていることについて、16名のうち14名の教師が次の点を困難に感じる場合がある。職場上の環境問題として必要な設備がないことと教室内はインターネットに接続していないことが問題としてあげられた。また、教材の選択に関する悩みを持っている教師もいる。次に学習者に対する答えもあり、クラスの中の学習者のレベル差が激しいことと、学習者のモチベーションがないことと、学習者の準備不足が授業に悪影響を与えると答えた教師がいる。また、教師としての自分の資格に関する答えもあった。それは自分の教授法を改善したいことと、新しい教授法を導入したいという教師の悩みであった。

#### 6. 終わりに

今回の調査は、自律学習が重視されている教育の現場では、カザフ国立大学の韓国・日本学科の教師が自分の役割を何だと思っているか、学習に対してどのような信念を持っているかということ把握するために行われた。教師の信念は学習者に大きな影響を与えていると言われていたが、今回の調査では半分の教師が自分の役割が学習者と総合責任であると思っていることが分かった。自分の役割として具体的には、「支援者」、「サポーター」という項目があがっていた。その一方「知識を与える」という答えが多くて、学習者は受身学習の対象者として見られていることも分かった。以上の結果は、学習者の立場からの答えが多いということ、つまり学習者は何をすべきか、という点が重視されており、教師側の条件、すなわち「いい教師が必要」において具体的にどのようなものであるのか、明らかにならなかったということを示している。自律学習より教師依存の考えの方が強い傾向にあると言える。今後の課題として、教師の信念が実際の授業にどのような影響を与えるのか、またどの点に反映するのかということ挙げる。

参考文献

- 青木直子 (1998) 「学習者のオートノミーと教師の役割」『分野別専門日本語教育研究会—自律学習をどう支援するか—報告書』国際交流基金関西センター
- (2001) 「教師の役割」『日本語教育学ぶ人のために』182-197
- (2005) 「自律学習」『新版日本語教育辞典』773-774 大修館書店
- (2011) 「学習者オートノミー日本語教育と外国語教育の未来のために」ひつじ書房
- 梅田恩康子 (2005) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割—学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る」『言語と文化』第12号、愛知大学
- 大西博子 (2006) 「日本語教育における自律性の転換」『言語文化教育研究』第5号 25-41
- 三宅若菜、藤田裕子 (2009) 「自律的な学習を目指して—日本語プログラムにおける教師研修の試み—」『Obirin today: 教育現場から』第9号 129-143
- Benson, P. (2011) *Teaching and researching autonomy in language learning (2nd ed.)* Harlow: Longman
- Borg, S., Al-Busaidi, S. (2012) *Learner Autonomy: English Language Teachers' Beliefs and Practices. ELT Research Paper 12-07*
- Dam, L. (1994) "How to recognise the autonomous classroom". In: Wolff, D. (ed.), *Die Neueren Sprachen: Lernerautonomie*. Bd. 93, Heft 5, 503-527
- Dam, L. (1995) *Learner Autonomy - From Theory to Classroom Practice*, Dublin: Authentik.
- Little, D. (1995) *Learner Autonomy 1: Definitions, Issues and Problems. Second Edition*. Dublin: Authentik

(シヨリナ・ダリヤグル、筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程、sdariyagul@gmail.com)